

〔高校生の部・小説〕

〔佳作〕

宵の隙間

都会で生まれ育った僕にとつて、外の世界（島の生活）は「退屈」であり、人間同士の面倒な関わりをなかに身を置くことに他ならない。一方で、外の世界に「異物」として入り込む僕に、その住人たちはどこかよそよそしく接する。島に対するうとましさや不安を抱える僕を鏡で映したかのような島の子供たちの態度により、僕の心理が却つて鮮明に描出されている点は面白い。他者は自身を映す鏡に他ならないからである。

しかし、「クチナシさま」の世界が描かれることにより、典型的なハイ・ファンタジーに話が流れてしまい、僕の心理描写を中心に描かれた前半部との距離が生じている点は残念である。何を問題とするのかを明確にする必要がある。

〔高校生の部・随筆〕

〔優良〕

戦後七十五年に思うこと

パプアニューギニアで戦死した曾祖父のことを祖父母から聴き、ひとりの人間を「加害者にも被害者にも」する「戦争」というものの「正体と、その上に今の「日常」が成立していることを私は知る。そして、新型コロナウイルスで混乱する世界、顔の見えないインターネットの世界に「加害者にも被害者にもする」という戦争の図式が重なることに気付く。戦争という人類史における悲惨な経験を現代の問題に接続して考察している点に、作者の批評的な眼差しを看取することができる。

しかし、題材である戦争に関する知識が十分ではないため、戦争を「若い世代が知る義務がある」という主張の説得力が低いことは否めない。調査や取材を行い、対象を具体化することにより、読者を更に引き込む文章として磨くことができる。